




たらのき

1 作型


月	1			2			3			4			5		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
作 型	露地普通栽培												— — —		
	ふかし促成栽培						— — —			— — —					
															

月	6	7	8	9	10			11			12		
					上	中	下	上	中	下	上	中	下
作 型	露地普通栽培												
	<div style="text-align: right;">ふかし促成栽培</div> 												

○ : は種 (根株植付け)

● : 収穫

□ : 剪定

 : ハウス

アピールポイント

- ・出荷時期: 12月中旬～5月中旬。
- ・山菜の王様で天ぷら、ごま和え等様々な料理に利用できます。
- ・パイプハウスと温床を用いて早出しするふかし促成栽培は、12月下旬～3月にかけて2～3回転の出荷が可能で、春の先取りができます。
- ・ふかし栽培と露地栽培を組み合わせることにより長期出荷が可能です。
- ・ふかし促成栽培は次々に新しい穂木を利用するため、病害虫の発生が少なく省農薬栽培が可能です。



2 各作型のポイント

(1) 露地普通栽培

1年目

植付け後に2芽以上出た株がある場合は、1本に仕立てます。

欠株対策として補植苗も養成しておきます。

植付けから梅雨明けまでは雑草の影響を受けやすいため、通路の除草をこまめに行います。管理機は根を傷める恐れがあるため使用を控えます。

立枯疫病の予防のため、6月～7月にかけての薬剤散布と併せて、排水溝の設置などにより排水対策も行います。2年目以降も同様に行います。

また、センノカミキリの被害を防ぐため、根際をきれいに保ちます。

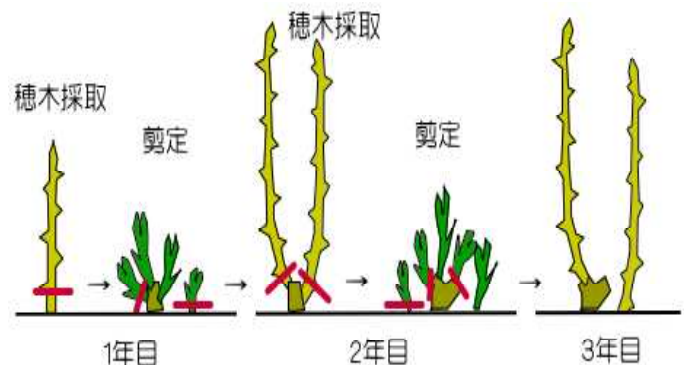


2年目以降

頂芽、側芽を収穫した後、地際を3芽程度残して切り戻し剪定します。ふかし促成栽培に向けた原木生産を行う場合は、仕立て本数は2本を基本とし、翌年以降もこれを継続します。

仕立て本数が多いと、充実した若芽を得られず、盛夏期に茎葉が過繁茂となるため、軟腐病が発生しやすくなります。地際から出てくる腋芽は順次間引きます。

施肥は剪定直後の新芽が伸び展葉しないうちに施用します。立枯疫病の予防のため、多肥は避けます。



(2) ふかし促成栽培

厳冬期(12月下旬～3月)の栽培のため、パイプハウスなどの施設を利用します。伏せ込み後は、ハウス内に二重カーテンを張り、さらに内側に小トンネルを作って梨地フィルム、保温マットをかけ、最高23℃、最低5℃(平均13～14℃)となるよう低めの温度管理を目安とします。温度が上昇しないよう、黒寒冷紗や換気扇を設置するなどの工夫をします。

穂木は2年以上の株から落葉後に採集し、節(芽)ごとに切断し、頂芽と側芽、太さ、長さ別に仕分けて床に伏せ込みます。

たらのきはほぼ1月末まで休眠しているため、休眠を破り萌芽を揃えるように、これ以前に伏せ込む場合はジベレリン処理を行い床に挿します。

収穫は、伏せ込みから30日程度で長さ10cmになったところで行います。

